

HIMALAYA

ヒマラヤ
No.321



1998 AUGUST



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

1999年H A J 登山隊員募集

未踏峰（カバン 6,717m）

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1. 期 間:1999年9月18日～11月1日(45日間)
2. 募集人員:6名程度
3. 負担金:95万円

チョム・カンリ（7,048m）

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 〆切り:定員になり次第

ニンチン・カンサ（7,206m）

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

表紙写真

ミニヤ・コンカ登山を検討したのは1989年暮れであった。この時、コンカの北側にある山群の一枚の写真を見た。いつかサマー・キャンプの舞台にしようと思案に考案していた。それが今夏サマー・キャンプの舞台となるラモ・シェであった。今回の写真は中村保氏が撮った西面であり、ルートは右上する稜を予定している。

(山森)

ヒマラヤ No.321

- | | |
|-----------------------------------|------------|
| 1. 伝説の中での迷走 | ハリシュ・カパディヤ |
| 8. H A J 創立30周年記念講演(4) | |
| Dr.ハルカ・グルンとネパール | 神原 達 |
| 11. ヒマラヤ登山遭難事故例 | |
| 14. ヒマラヤ登山大量遭難一覧表 | |
| 19. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉 | |
| 22. ラモ・シェ(田海子山・6,070m)登山計画 | |
| 24. 事務局日誌 | |

伝説の中の迷走

ハリシュ・カパディア

1934年、経験豊富な二人のイギリス人探検家がガルワール・ヒマラヤを訪れた。実際のところ、彼等の名はこの時の探検で世に知らしめられた。二人の名は、エリック・シプトンとビル・ティルマン。彼等は当時未知の地であったナンダ・デヴィ聖域への入域を企てていた。その年の夏、彼等は険悪なリシ・ゴルジュ沿いにルートを見出し、そこに若干の食料と装備をデポした。モンスーン到来時には、バドリナートに引き上げていた。彼等はしばらくの間は他の場所にいて、モンスーンが明けたらナンダ・デヴィ聖域に戻り、計画を遂行しようと考えていた。

バドリナート滞在中、二人はあるヒンドゥ教の伝説を耳にした。その伝説によると、かつてケダルナート寺院のある僧侶は、バドリナート寺院に参拝するために高所のコルを越えて、その日の内にケダルナートからバドリナートに到達したと云う！それが事実だとしたら、この地域の地形や地勢を考えてみたら、この行為は登山としてもかなり優れた偉業である。シプトンとティルマンは、勇敢なシェルパ達の協力の下、この伝説の信憑性を探ろうと企てたが、惨憺たる結果に終わった。

二人は、ヒンドゥ教の伝説を確かめるべく、サトパント氷河の源頭部にある困難なコルを越え、グンダルボンギ氷河を下降したが、上部では氷壁にてこずり、下部では熊が横行する深い森林帯に入り込んでしまった。予定していた日数を大幅に過ぎてしまい、食料が底をついてしまった。彼等は、飢えを凌ぐために、熊と戦いながら竹の子を集めなければならなかった。生還するための冒険談と身の毛のよだつような時間を体験した後、ガウンダール村に出ることが出来た。

我々は、彼等は伝説の道の場所を誤認したのであろうと考えた。彼等は、サトパント氷河の源頭

部のコルを越えている。地元の情報や現代の地図によると、サトパント氷河南側のパンパティア氷河源頭部に標高の高いコルが存在する。我々は、おそらくこのコルは越えられると考えた。このコルはマディヤマヘシュワール寺院へ直接辿り着くマインダガラ谷へと続いている。この谷の上部で、シプトンとティルマンが苦戦を強いられたのである。おそらく伝説にある道は、寺院から直接辿り着けるこのパンパティア・コルを巡ってのものであろう。

1984年、1934年にシプトンとティルマンが辿ったルートを再踏査しようと試みた西ベンガルから来た二人のトレッカーがいた。おそらくマディヤマヘシュワールからパンパティア・コルを経由してバドリナートに向かおうとしたものと思われるが、彼等の姿を再び見た者はいなかった。マインダガラ谷内で死亡したものと思われる。

我々はバドリナートである人物に出会い、親しくなった。彼は“パンダ（僧侶）”であり、しかも強健な男である。剃髪しており、額にはティラックを付け、まるで知識のかたまりのような人物に思えた。私は彼に、高所のコルを越えその日の内にバドリナート寺院を参拝したと云う、古い伝説のケダルナート寺院の僧侶について尋ねた。

「多分事実だと思う。地表が平坦だった頃に、僧侶はケダルナートからバドリナートへ来たんだ。」僧侶は山々が隆起する以前にそのままヒマラヤを通り抜けた。「その後、ニルカント峰が隆起して、巡礼の道を塞いだんだ。」

彼は話を続けた。「ここは“バドリ”と呼ばれているが、それは、平坦な土地にしか実らない果実“バドリ”に起因している。今はもう“バドリ”はここには一本もない。だから、かつてこの地は平坦な土地であったに違いない。」

「しかし、地図からすると、コル越えは不可能
と思える。現代の科学的社会では、その日の内に
コルを越えて来る事が出来るとは到底信じ難い。」
私は反論した。

「これは本当の話なんだ、もっとも、信仰心が
足りない者には信じる事は難しいだろうが。伝説
の道は確かに存在したんだ。今だって探せば見つ
ける事は出来る。」そして、しばらく考えてから
彼はこうつけ加えた。「それは、信じる者だけが
見つけれられるのだ。」(註：ヒマラヤ各地ではこの
様な逸話が幾つかある。ラダックのヌブラ谷にあ
る古代のヤルマ・ゴンパの壁の裏は夕刻には金色
に輝くと云う伝説があり、1929年にイタリア隊の
Dainelli博士は、その伝説を信じてヤルマ・ゴン
パを探し求め、遂にその現象を目撃したと云う。－
H・J第4号参照－)

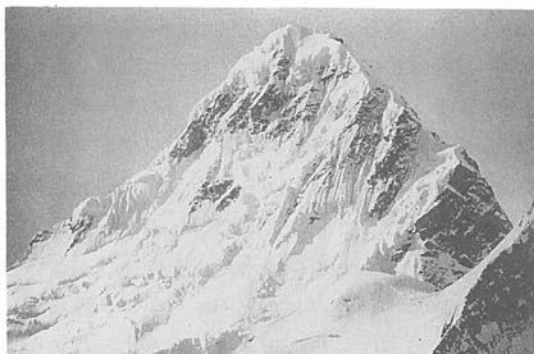
寺院の鐘が鳴り響き、参拝の時刻を告げた。私
は、寺院の別の入り口から入る特別なプジャのた
めに51ルピーを支払った。しかし、それはどうに
かなってしまいそうな体験だった－ほこり、押合
いそして群衆－。私は、若いラワルがプジャの仕
方を熟知しているのが信じられなかったが、彼は
私にどのように振る舞うのかを教えてくれた。寺
院から外に出てみると、私の信仰心は中に入る前
より薄れていた。“失われた何かを求めて、行っ
て見つけだせ”と云うキプリングの忠告にほぼ従っ
て、件の伝説の道を捜しに出掛ける準備は出来た。

パンパティア谷へ

我々はパンパティア谷に沿って伝説の道を探る
事にした。一般民衆にもこの伝説について尋ねて
みた。殆どの者がこの話を聞いた事があると答え
たが、彼等は、その僧侶が来たのは遥か彼方にあ
る“ケダルナート”寺院からではなく、“ケダル
ナート”地域のどこかから来たのだと思っている。
1997年5月31日、ニルカンタ峰の景観を楽しみな
がら3日間の高所順応活動をした後、いよいよパ
ンパティア氷河への準備が整った。

6月4日までには、キラオ村、2,840m地点、
川沿いの3,360m地点、そして突端部3,860m地点
と順調に進み、標高4,400mの氷壁の基部に到達
した。我々の目的は、上部パンパティア雪原南西

▼ディオ・ディクニ雪原から望むニルカンタ北壁



に位置する標高5,250mのコルに到達する事であっ
た。このコルを越えたら、マインダガラ谷からグ
プタ・カシ(ケダルナート)を経由してマディヤ
マヘシュワール寺院へ辿り着けるはずである。

氷壁には3本のルートを試みたが、そのいずれ
もが、巨大なクレバヴァス帯に行く手を阻まれた。
そこを通過するためには多量の装備が必要となる。
北に伸びる急な斜面に数本のロープを固定し、なん
とか上部雪原に到達した。しかしながら、そこ
からパンパティア・コルまではクレバヴァスだらけ
の雪原を7キロメートルも横断しなければならない。
残念ながら、断念する事にした。6月13日、我々
は同じルートを下降し、バドリナートに引き返し
た。キラオからカルペシュワールに至る谷の下方
に、一つコルがあった。“ケダルナート”地域に
通り抜ける事が可能なのは、唯一このコルである
と確信した。

我々は休養と食料調達のためにジョシマートへ
向かい、ジョシマートの高台にあるスキースノー
リゾート地として開発されたオーリを訪れた。そこ
でオーリの呼称の由来を尋ねたところ、ユーモラスな
逸話が返ってきた。或る時、一組の恋人同志がこの
地を訪れた。霧に巻かれてその女性が行方不明に
なり、二度とその姿を現さなかった。男性は叫び
続けた「オーリ、オーリ」。因に、オーリとは、
この地方の方言で“来い”を意味する。この話を
我々にしてくれた茶店の店主が歯を剥き出して笑
いながら話を続けた。「今じゃ観光客を呼び込む
のさ“オーリ、オーリ(来い、来い)”って。」

1934年、シプトンとティルマンは次にはバギラ
ティ・カラク氷河を辿ったが、彼等は、計画した
ミーズ・チャウカンバ・コル越えのルートを確認

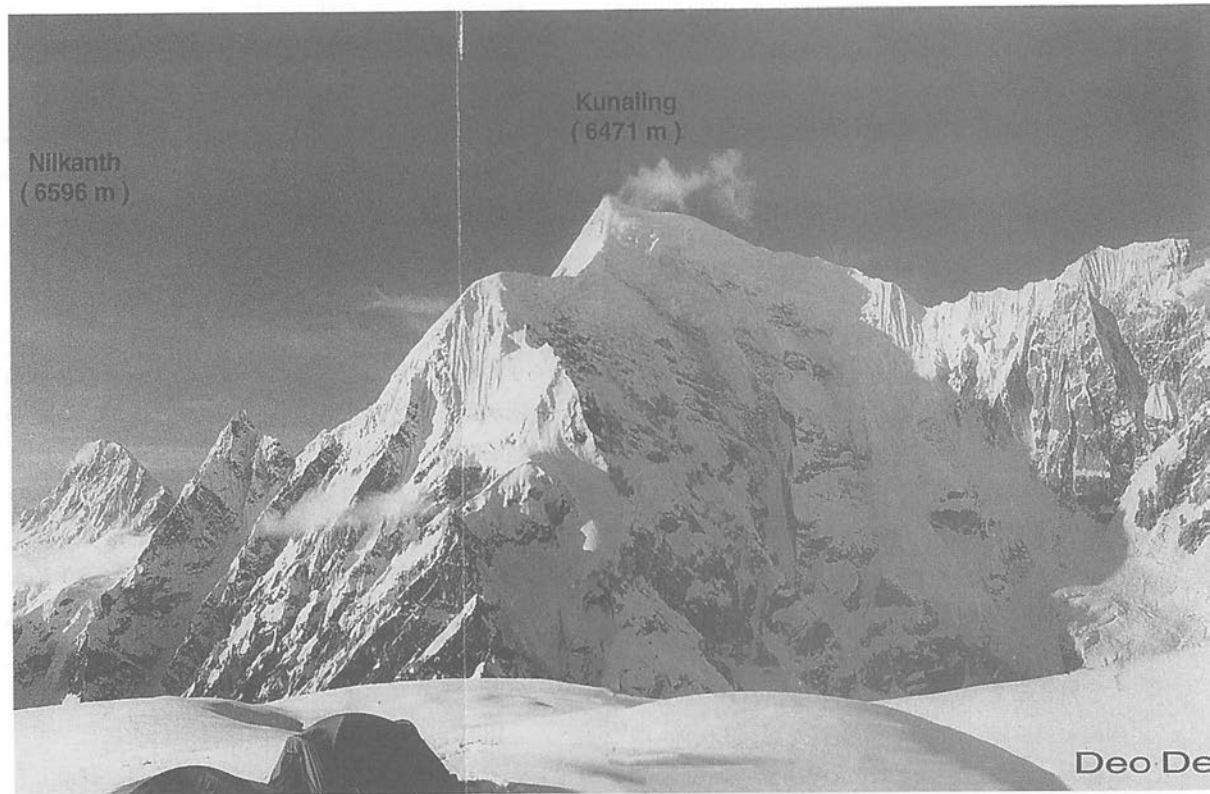
出来なかった。このコルには支谷からは到達できるものの、本谷からのアプローチは危険極まりない。彼等はこの支谷からアプローチ出来る事を確認できず、探検を終えてからC. F. ミードと話していて、初めてこの事を知った。シプトンとティルマンは、アルワ谷に出るためこの谷の北側のコルを越え、ガンゴトリ氷河のゴームクへ到達べくカリンディ・カルを越えた。その後、彼等は往路と同じルートでバドリナートへ戻り、探検史に新たな伝説を作った。我々は、我々の行程の後半をこのルートを辿る事にしたいと思った。

チャウカンバ・コルを目指して

6月14日、我々はバギラティ・カラク氷河に入った。有名なヴァスグラ滝の麓を通り過ぎ、アルカブリ(3,560m)、カドゥ・カラク(4,150m)とキャンプを進め、通常チャウカンバ登山の際のABCを設営する場所より少し手前の下部ディオ・ディクニ(4,400m)に到達した。そこはモレーンに挟まれた寒くて吹き曝しのわびしい場所であっ

た。コックのジョン(アン・ニマ・シェルパ)がキッチン場所に最適な場所を見つけた!と叫んだ時には、我々はテント設営に適している場所を探していた。ようやく横になれる場所を確保できた! ジョンは、我々が吹き曝しの場所にいることを気にしてはいなかった。彼は、いつもコックとしての権利を優先する。何はともあれ、我々のBCは建設された。

上部ディオ・ディクニ雪原(5,200m)へは、異なる二つのルートが採られた。ラジェシュとモネシュは3人のシェルパとチャウカンバ・コル(6,050m)を目指した。1912年にC. F. ミードがこの峠に到達して以来、バギラティ・カラク氷河側からチャウカンバ・コルに立った者は皆無である(註: 1995年チャウカンバI峰を目指したシモン・イースレーは、ガンゴトリ氷河側から到達している)。ミードは、7月にバギラティ・カラク氷河上のキャンプからコルまで7時間以内で到達している。しかしながら、ルート上の雪は一面腐っていてもぐるので、登行は非常に困難を極め、



▲ディオ・ディクニ雪原から南側のパノラマ、向って左からニルカンタ(6,596m)

4,850mまで到達した時点で断念して本隊に合流した。彼等は素晴らしい試登を為し遂げ、困難な状況の中でその地点まで到達したと云うのは素晴らしい成果であった。(最近私は、私の旅の中で、過去の驚異的な事実を度々発見している。例えばこのミードの踏査の様に、今日では信じ難いような初期の探検家達の活動内容である。現在では、バギラティ・カラク氷河側からチャウカンバ・コルまで7時間で到達するのは、不可能であろう。過去の探検家達は我々よりずっと健康でタフだったのであろうか、それとも地形が変化したのだろうか。ひょっとしたら、彼等は帰国便の予約をしていなかったもので時間はいくらでもあり、それでかえってコトを急いで運んでいたのではないだろうか！)

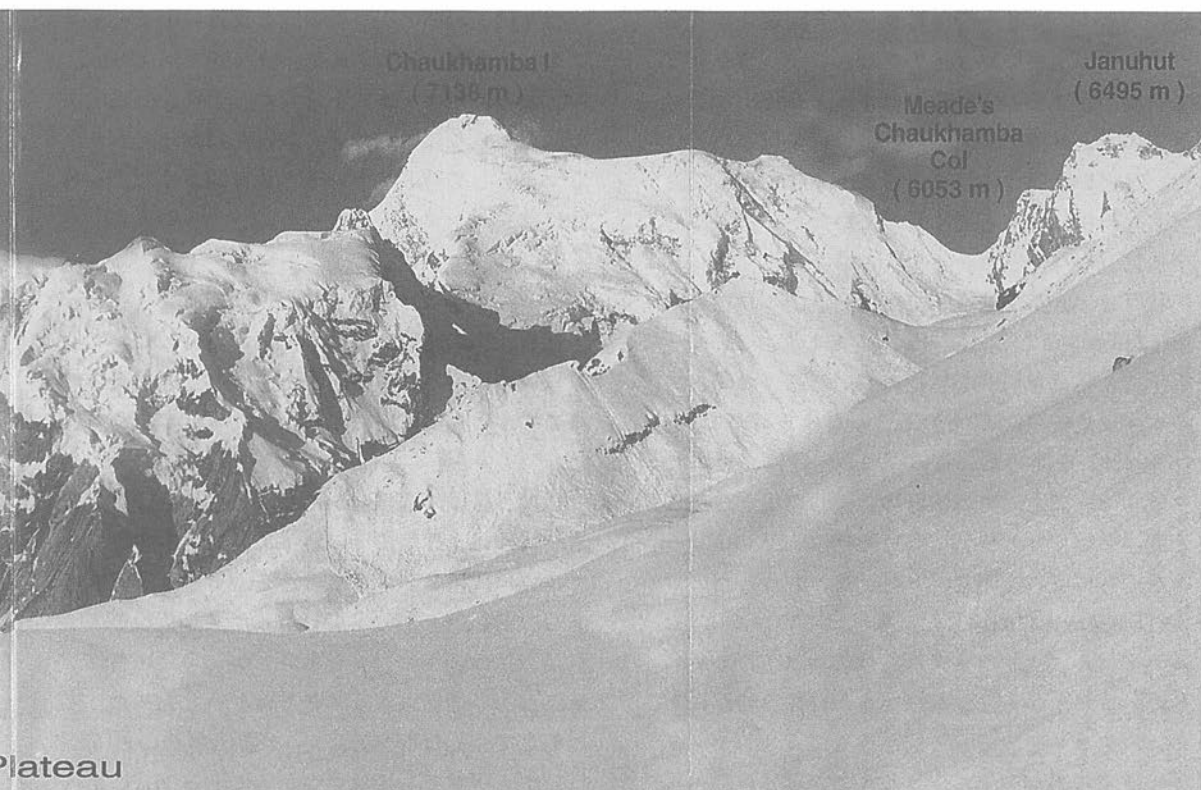
その間に本隊は、上部ディオ・ディクニ雪原に上部キャンプ(5,200m)を設営していた。6月19日、私ハリシュとジョンことアン・ニマ・シェルパがバガット・ピーク(5,650m)に登頂した。午前7時に出発、登り始めてすぐジョンがロープ

を解いたので、私はてっきり彼は“朝のお勤め”に行ったのだと思った。実は、帰ってきてから優雅に食事の準備をするために、水を探していたのだった！またしても彼は、自分のコックとしての権利を優先したのだ。我々は、“神々の景観”を満喫しながらのんびりとリッジを登り、帰りにはジョンは食事の準備のために水を汲んだ。

私は、休養のためにBCに降りた。翌日カイヴァンとミンマは雪原上の5,360m峰と5,400m峰の2峰に登頂した。二人は面白い登山をして、6時間以内に戻ってきた。

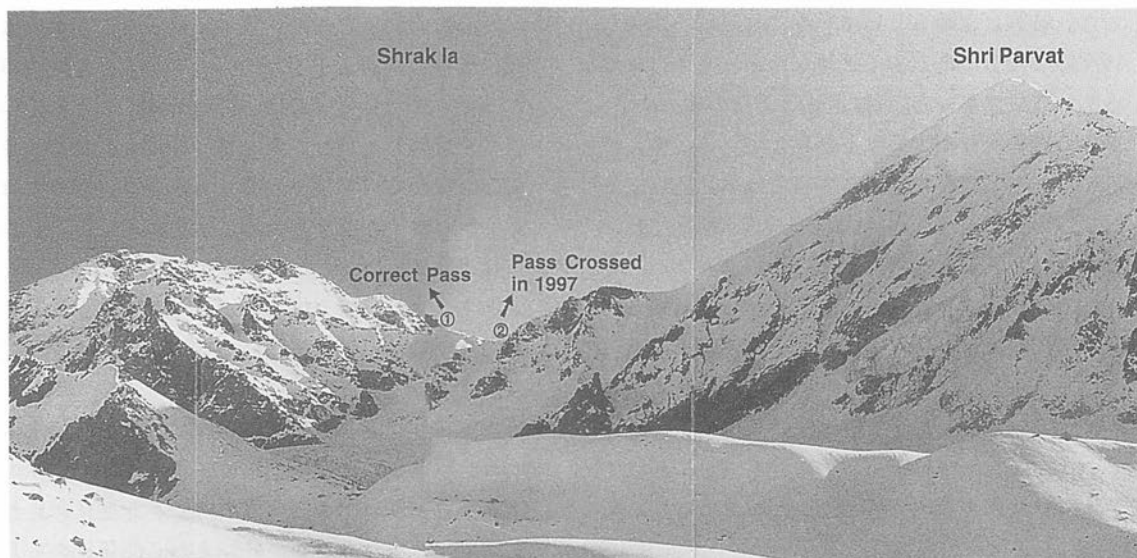
1934年シプトンとティルマンは、我々同様チャウカンバ・コルに到達出来ず、ディオ・ディクニ雪原からシュラク・ラ(岩の峠)を北側に越えた。シプトンとティルマンの峠越えから63年後の6月19日、我々はこの峠に到達した。翌日、我々の隊荷はこの峠上と、その先に運ばれた。

6月22日、全員が峠を越えた。前方北側の峠には二つのガリーがある。東側のガリーは谷底まで急傾斜で落ちており、幾筋か雪崩の跡がある。西



▲クナリン(6,471m)、チャウカンバI(7,138m)、ミーズ・チャウカンバ・コル(6,053m) ジャヌフット(6,495m)

▼バギラティ・カラク氷河、ディオ・ディクニ雪原よりシュラク・ラを望む



側のガリーは幅広く、アルワ谷へとなだらかに落ちており、容易に下降できそうである。しかし、全員が峠に着いた時には既に、東側のガリーに沿ってロープが固定され、荷物も途中まで降ろされていた。我々が明らかにシプトンの素晴らしい忠告を忘れていた―“登山とは偵察、偵察、偵察の連続である”。ガリー全体にロープを固定せざるを得ず、その上狭いガリーをシューシュー音を立てて雪崩が起きるので、我々はルートを見出せず、正規のルートである容易な幅広い谷を見つめていた。ひどい降雪の中、氷河上の5,400m地点で設営した時には夕方も遅くなっていたが、幸運にも全員傷一つなかった。

我々は、支谷を最後まで下降し、アルワ谷支谷の5,280m地点で2日間キャンプをした。このルート上で、私は永い間心に秘めていた二つの峰、アルワ・タワー(6,350m)とアルワ・スパイアー(6,193m)を眺めた。この二つの岩峰は、優れたクライマーにとっては格好の腕試しの場となること間違い無しであろう。再び1934年の二人のトレースを追って支谷を遡り、6月25日、もう一つのコル(5,084m)に到達した。我々はこのコルに“セルガ・コル(クレヴァスだらけのコル)”と命名した。コル上からは、飛びつきたい程真時かにビルニーのコルを、そして遥か遠くにカリンディ・カルを望む事が出来た。コルまでの足元は、ベルグ・シュルンドとクレヴァスだらけであった。我々

のチームは総勢14名もいるので、誰かがこのクレヴァスやベルグ・シュルンドにはまるかも知れなかった。返す返すも残念であったが、これ以上先に進む事はあきらめざるを得ない。困難な峠越えをするには、明らかに今年のこの時期は向いていなかった。

我々は、再びアルワ谷の同じ支谷の中でキャンプをし、地図上に“アルワ・タール”(4,720m)の記載のある場所まで下降した。現在、その場所には“タール(湖)”は無い。我々はガストーリからマナそしてバドリナートと3日間かけて、6月29日にジョシマートに戻った。

旅を終えて

私は、旅の終わりに件の僧侶に出会った。

「道を見つける事が出来た事だろう、君達の無事をずっと祈っていたんだ。」と、その僧侶が言った。

私は、伝説の道はなかった事を彼に話した。古き時代には、確かにその道はあったかも知れない。だが、現代においてはその道を通る事は不可能である。僧侶は、半分は正しかった。しかしその時私は、私のように真実を半分しか知らない者は、造詣が深い僧侶に言うべきではないと思った。

そこで、私はこう答えた。「僧侶がその近くへ行けば、困難でも道は見つかるでしょう。」オーブレイ・メネンの書にあるように、「我々は一般

には真実を知っている。しかし、だからと言って
 純朴な人々の純粋な信仰心を打ち砕く事は、決して
 すべきではない。」だから、伝説の道は本当に
 あったのかも知れない。いつの日にか誰かが、彼
 の地と此の地を、伝説の道を越えて繋ぐかも知れ
 ない。シプトンとティルマンは、もう少しのとこ
 ろでそれを為し遂げる事が出来たのだ。

我々は疲れて、家に帰り付くのを楽しみにして
 いた。自分達の旅を終えてから想像を巡らせて見
 た、シプトンとティルマンは、困難極まり無い伝
 説の道探しをした後でナンダ・デヴィ聖域に戻り、
 あの探検を為し遂げたのである!!

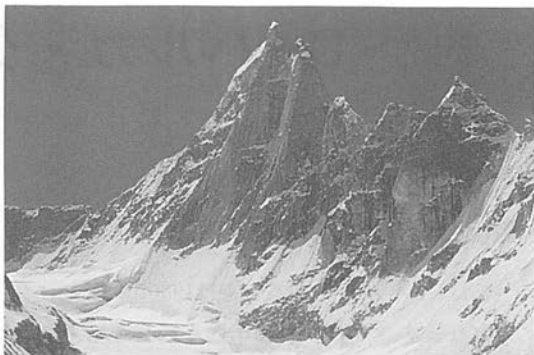
踏査隊概要

メンバー：ハリシュ・カパディア（リーダー）
 モネシュ・デヴジャニ、ラジュシュ・
 ガドゥギル、ヴィジャイ・コタリ、カ
 イヴァン・ミストリー

踏査期間：1997年5月25日～7月4日

踏査地域：中央ガルワール・バドリナート寺院西
 側（パンパティア谷、バギラティ・カ
 ラク氷河及びアルワ谷周辺）

▼アルワ・スパイアー（6,193m）



派遣母体：The Mountaineers, Bombay.

参考文献：

- 1.Nanda Devi by Eric Shipton.
- 2.Approach to the Hills. by C.F.Meade
- 3.Throne of Gods, by A.Heim and A.Gansser
- 4.Kamet Conquered, by Frank Smythe
- 5.Himalayan Odyssey, by Trevor Braham
- 6.Mountain Delight, by Bill Aiken
- 7.The Himalayan Club Newsletter 38.
- 8.The Himalayan Journal Vol.VII

（HJ.vol.54より訳出：寺沢玲子）

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売（日・祝日の場合は前日） 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

98年

- ★ 1月号
- 2月号
- ★ 3月号
- 4月号
- ★ 5月号
- 6月号
- ★ 7月号
- 8月号
- 9月号
- ★ 10月号
- 11月号
- 12月号

特集

ぼくの好きな雪の山小屋で
 粉雪わけて爽快山スキー
 駅から登るとっておきの山
 新緑と残雪を求めて5月の山
 山の本、名作をめぐる春山紀行
 高層湿原、もう一つの尾瀬へ
 夏は北海道の花と溪流へ
 真夏に涼を求めて、高原へ
 初秋の単独行の山歩き
 上信越の紅葉をさぐる
 名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
 冬山入門、心構えと特選コース

（★は特大号となります）

東京新聞出版局（中日新聞）
 東京本社

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
 全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

Dr.ハルカ・グルンとネパール

神原 達

■出会いとその後

私はDr.ハルカ・グルンとは1960年に最初に会っております。それから40年近く親交を結んでおります。

私自身ヒマラヤ登山に憧れまして、1950年代からヒマラヤを目指し1960年に最初にネパールに参りました。

その時はインドのカルカッタまで船で行きましてそれから汽車でパटनाまで。パटनाからカトマンズまで飛ぶロイヤル・ネパールの飛行機、当時はまだC-3型のダコタ機です。

それを待っていましたら飛行場の向こう側から日本人にそっくりの青年が、4～5人歩いてきまして、私の所に近づいてきまして「お前は日本人か」と聞かれました。そのグループはネパール人の学生でインドのパटना大学の留学生でした。

その中で積極的に話し掛けてきたリーダー格の人が、国連大学の関係で今、金沢にいますラトナシャルシェル・ジャン・バハドール・ラナ、ラナ家の人で世が世ならマハラジャになっていたかもしれない所謂Aクラスラナ。

ネパールにはラナと名のつく人は沢山いますが、それはA、B、Cクラスに分かれます。Aクラスラナはマハラジャの継承権を持っているラナ。彼はその一人であった訳です。彼はアメリカに留学して後に経済企画庁長官などやりました。

その一番後の方でモゾモゾと自分も日本人と話しをしたいのだけれどもと、なんとなくいたのが、グルン族のハルカ・グルンだったのです。彼はその後パटना大学からどうしてもドクターまで学びたいと、駐ネパールのイギリス大使に交渉しまして、自分たちヒマラヤのグルン族は散々グルカ兵としてイギリスのために貢献したんだ。私のためにイギリスは奨学金スカラシップをなんとか出してくれないか、と大使に直訴しました。

その時の大使が理解があってポケット・マネーでハルカ・グルンに奨学金を出してくれた。彼はそれでエジンバラ大学に留学してドクターを取り3年後に帰国しました。

その時のドクター論文が「ボカラ・バリーの地理学的研究」でした。時々、現地野外調査のためボカラへ行き、カトマンズに帰ってくると私の所に来て、サッカーをしたり、またある時は、彼の故郷がアンナプルナとヒマルチュリの間ラムジュンのナイチェなので、そこで何年に一回しか行われないアルグンといわれるお祭りに誘われて行ったこともあります。この祭は「天に召された自分たちの祖先の魂が地上へ戻ってくる時にやる儀式」です。

彼がイギリスでドクターをとってネパールに帰ると王様（現国王の父親のマヘンドラ国王）が、「お前はグルン族で初めてのドクターになった」ということでゴールド・メダルを与えたのです。そして政府の役人に抜擢し、経済企画関係などから最後は観光大臣まで務めたのです。20年以上も前のことです。

彼と私とはその後仕事のことは一緒にすることはありませんでしたけれども、趣味の登山ということでは、私がロンドンにいた頃クリス・ボニントンのエヴェレスト南壁初登攀の報告会がアルパイン・クラブであった時に私も聞きましたがその時は彼も一緒でした。

ネパールのハルカ・グルンというと、国際登山隊で副隊長を務めたりして登山の方でも有名ですが、どちらかというと彼はサッカーの方が好きで、学生の頃はサッカーの選手として有名だった。真面目で紳士で、私は家族ぐるみの付き合いをしています。

■ハルカ・グルンの原稿から

今日、ここでハルカ・グルンがネパール・ヒマ

ラヤについて書いたものを代読するのですが、お手元にある日本語訳で一か所気になることがあります。こうした方がいいなと思いますので直して戴きたいと思います。「さらにオーバーユースの山では入山制限をすべきである。」とありますが、原文からすると、「さらにこのような過密なトレッキング地域及び山々では、そこで得られるインフラ関係に従って季節的に最適の登山隊の数にすべきである」と訳するのが適当だろうと思います。

ハルカ・グルンから私のところに送って来た原文を見ますと、彼は地理学者でなかなかの勉強家でありますので、ネパール・ヒマラヤに入山した外国登山隊の数、国別、登山料、費用について観光省にある統計を元にして、また金額については大蔵省の資料を元にして、どれくらいのお金がネパールに落ちたかということの問題にしております。ネパール人の立場に立てばそれが一番の問題であろうかと思えます。

さらにネパールの現地の環境保護に関して彼は一番気を配っています。登山隊によって環境が荒らされることについて彼は心を痛めております。そして登山料など政府に入るお金は山々のある現地へ直接還元することを提唱しています。そのお金は環境を保護するために直接使うべきだと云っています。こういうことは大事なことだと思います。

彼は観光大臣という立場はとくに離れて、今は環境関係のコンサルタント業（ヒマラヤ地域で開発が行われる時、例えば電源開発を行う場合に環境的な問題はどうかなどについて必ず第三者の調査機関に委託します。環境面で問題がないことになって初めてそのプロジェクトが進行する訳ですが、その調査関係の仕事を請け負うコンサルタント）をやっております。彼自身も自分の仕事にもやりやすかったのかも知れません。

私は最近再びネパールに戻されました。仕事は日本政府がネパールに対して行ったODA国の援助がどのように有効に使われているかどうかの査定を行うことです。昨年ネパールに行ってきた。私はインフラ関係でJICAの専門員の辞令をいただきました。再びネパールとの接点がで

きました。

1960年代から比べるとカトマンズは雲泥の差で観光化され、その汚くなったこと、人口が2倍ちかくに増え、埃と車の排気ガスで今やカトマンズの観光客はマスクをしながらお寺に行く状態です。この現実をなんとかしなければいけないのですが、それではどうしたらいいのかというと、観光立国は難しい。ブータンがネパールの状況を見ながら外国人を入れてもろくなことがないと、云うのでブータンは観光客を締め出して限定しているようです。

それでも登山隊は、カトマンズの汚れとは無関係に山の奥に向かう訳です。彼の原稿にもありますが、未だ登られていない小さい山が沢山残っている。とくに西ネパールに残っていると書いています。サーヴェイ・オブ・インディアという昔からあるインド測量局によって作られたヒマラヤの地図、これがハルカ・グルンの原稿ではクォーターインチマップといいまして、1インチが4マイルのスケールの地図。これが大体25万分の一なんです。昔はその地図で、しかもその復刻版みたいなものが戦時中の日本で出されたりしました。そういうものを見ながらヒマラヤに行ったんですが、これのもっと詳しい日本の5万分の一の地図に相当する、1インチ1マイルの地図が、今やヒマラヤのかなりの所で出来たと先程伺いました。

ハルカ・グルンはヒマラヤの山を数えるに当たっては、クォーター・インチ・マップ25万分の一の地図で数えました。その所は訳文に載っていません。とにかくそれよりもっと詳しい1インチ1マイルの地図が出来ているということなので、それを見ればさらにもっと山が増えるかも知れません。

私がハルカ・グルンと一緒にヒマラヤに行ったのは、今で云うトレッキングに相当する彼の故郷のナイチェ村へ行っただけなのですが、実はその2年前1960年に最初にヒマルチュリのBCまで私一人で行ったことがあります。その時は慶應大学が初登頂した時です。BCに訪ねて行きました。

BCまで人気のない全くのジャングル地帯で、鬱蒼とした森でジャクナゲが綺麗に咲いていましたが、なんと蜂の大群に襲われました。実はハル

カ・グルンの村の上を歩いて行ったんです。綺麗な円い村落があって、そこでは男がある程度の歳になると、度胸試しに山に行き蜂の巣をとってくるんだと彼から聞きました。

ネパールでは、ヒマラヤの山の木を沢山切ります。それは登山隊だけではありません。人口が増え過ぎて村が過密状態になって家を作り畑をドンドン増やしていきます。そうすると森を切ってしまう。彼のナイチェ村の上の方の森も大分切られて、村で地滑りが起きて村が全壊してしまったという悲しい知らせを何年前に聞きました。

ネパールの山々に住む人達、これはなにもグルン族だけではなく、タカリ族（ヒマラヤの交易民族）などは、何人かは日本に定住しています。ネパールに対する文部省の最初の留学生の中から二人が医者になりました。二人共日本人と結婚しています。そのうちの一人にタカリー族のトラチャンは、実に辛辣にネパールの批判をします。確かに外から見ているとネパールは問題があまりにも多くて、批判的になるのでしょうかけれども、ヒマラヤの人々はそれぞれ皆実にいい人達が揃っております。

その人々に囲まれて山登りができると言うことは、私たちヒマラヤの好きな者にとっては大変恵まれたことであろうかと思えます。

■地域開発のむずかしさ

さらにハルカ・グルンの想いを述べますと、地域開発がいかにむずかしいか。一例をお話ししますと、今、日本山岳会（編注：HAT-J）がどこかでリングの木をネパールに植えましょうという運動をしている方がおられると聞きました。実は30何年前に既にインド人の園芸専門家が、カシミールのリングをネパールに持って行っております。インドの援助でヒマラヤにリングを作る話は、30何年前から進められてました。そしてその木が大きくなってリングがいっぱい採れました。ところがこれをカトマンズに運べない。みんな腐らせてしまいました。そしてそのためのリング畑は、もったいないと云うので30何年たったリングの木を今や全部切って元の麦畑に返しています。そういう事実もご存じなくて今更なんでリングを

どうしてネパールに援助するのか。実情をご存じない方の話しです。

カトマンズではリングをどうしているかと云うと、カシミールのリングをインド経由でトラックでネパールへ持って来てカトマンズ市内でインド人の屋台引きが売っている。

ネパールでも実は山の中、ムスタンで採れたリングから作ったラム酒があります。ハルカ・グルンがそう云って私の家に持って来てくれたことがあります。なかなか美味しい酒でした。そんなこともありましたが、コストも高くて売れないので結局リング畑は潰れていると云うのが実情です。

この開発の問題は余程考えませんと難しい。次いでに申しますと安易な援助、NGOの援助で村に学校を作ってあげるとか、善意でやられること自体は大変結構なことなのですが、結果的にはそれがマイナスになっている。一つの村に学校を作っても隣の村に学校がなければ、隣の村の人は何であの村だけいいことになるんだと思います。学校を作っても維持がどれだけ続くのか。全てが援助によるものの維持というのはまず絶対に駄目です。ともかく自立心を真っ先に育てなければいけない。依頼心ばかり多くなる現状は考えなければいけない。

というのはなにもNGOだけではなくてODAも通じて全部言えることであって、全てが外国がやってくれるからいいや、というような心が今やネパール人にかかなりある。これは悲しむべきことであり、何とか変えなければいけない。

ハルカ・グルンの云わんとすることを話しましたが、環境破壊を何とかしなければならぬ、ヒマラヤの登山で得られる収入はネパールの政府だけのものではなくて、その地域の住民に還元されるべきであるというような趣旨であります。

この訳文にもありますが、ヒマラヤが今や戦場・挑戦の場から今やプレイグラウンド、ヒマラヤ登山を本当に楽しむ場所になって来た、というネパール・ヒマラヤの中において、彼はヒマラヤの登山隊に対する理解が一番ある人であります。大いにプレイグラウンドとしてのネパール・ヒマラヤ登山を楽しんで下さいと彼は云っております。

（講演を要約しました。文責：山森）

ヒマラヤ登山遭難事故例

世界最高峰エヴェレストは、ご存じのとおり1953年5月29日に初登頂された。あれから今年（1998年）春のシーズンを終えて丸45年が経ち、どうやら延べ登頂者数が「1000人」を突破した模様である。

最高峰の登頂者数千人が驚くべき数であるのか、意外に少ない数であるのかは、多分に感想が割れるところであろう。

しかし、延べ登頂者数が500人を越えたのが、わずか5年前の93年春のシーズンだったことを知ると、この5年間に500人が登頂したことになり、世界最高峰に異変が起きていることに間違いはなさそうである。

そして、世界最高峰の異変は、エヴェレストが在る「ヒマラヤ登山」の「一極集中」現象の象徴と見るべきであろう。その一極とは、ヒマラヤのジャイアンツの異名をとる「八千メートル峰」のことである。我も我もと八千メートル峰に向かう現象が世界的に起きているのである。その八千メートル峰登山の現状については、機会をあらためて紹介したい。

ところで、人類がヒマラヤ登山を始めてから既に100年が経過したが、この間、ヒマラヤを目指した世界の岳人のうち、どの程度が志し半ばにしてヒマラヤで遭難死したのであろうか。次号以降で各地域別に整理し、実態を紹介する予定であるが、今回は特に「大量遭難」について別に整理してみた。これはあくまでも六千メートル以上の峰を対象とし、一原因で3名以上が遭難したケースである。（一部同一隊でないケースも含まれている）

また、旧ソ連のように、遭難の実態が掴めないものなどもあるが、極力拾い上げることにしたので、一部については不正確なものも混在している。

地域別に代表的なケースについて紹介するが、日本隊については、既に何回も紹介済みであるので割愛した。

（文責・山森 欣一）

大量遭難の例

I. エヴェレスト

(3) 1922年6月7日 ノース・コル直下 7名
イギリスの第二次隊。実質的には初めて登頂を目指した隊。5月21日に3名が、8,225mに到達。27日に3名が、8,326mに到達。事故は3回目のアタックのために、ノース・コル（約7,000m）に張られたC4に向かう途中に起きた。メンバーは、サマヴェル、マロリー、シェルパ、クロフォードの順にアンザイレンしていた。その後、4名、4名、5名に分かれた3組のシェルパが、それぞれアンザイレンして続いていた。コル直下の最後の急斜面は、予め雪崩の発生を危惧していた場所であった。この時の雪崩の模様を、マロリーは「孔の口をふさがない火薬の爆発のような音を聞

き、右手の雪面が2～3ヤードのところで裂け、しわがより発作的にその方向に2歩踏み出した時、ゆっくりと下へ動き始め、流動している全体の表面に運ばれていった。」と述べている。

結局上部の2組は自力で脱出できたものの、後続の2組9名の内、7名が死亡し、その内の1名は行方不明となってしまった。7名はエヴェレスト登山初の犠牲者となり、遺体はクレバスに安置された。

(30) 1974年9月9日 西稜 6,400m 6名

フランスのガイドでアンナプルナ南峰の困難な南壁の初登攀者であるジェラルド・ドヴァゾーら10名がネパール側の西稜からエヴェレストの縦走を狙って入山。アイスフォールの通過を避けて、ロー・ラの上に三つのキャンプを建設したが、9

月9日C2を朝7時半に側壁から雪崩が襲い、ドヴァゾーとラクバ、ワンギャル、ドルジェ、ルトクとC1(6,000m)のワンチュが死亡したもの。モンスーン中の早い時期の雪崩事故。

II. ネパール

(24) 1972年4月11日 マナスル 15名

前年に遭難事故のため断念した金楨燮隊長率いる韓国隊に日本の安久一成が参加して、マナスルのノーマル・ルートからの登頂を目指していた。4月11日午前3時半頃、降雪の中、雪崩が発生しC3(6,500m)に寝ていた6隊員とシェルパ12名が襲われた。この時は、安久を含む3隊員とシェルパ2名が生き残った。しかし、1時間半後に再び雪崩が襲い金礼燮隊員とシェルパ1名を除く3名も死亡した。結局、安久を含む隊員5名とシェルパ10名が犠牲となる大惨事となったのである。

(97) 1994年11月13日 ピサン・ピーク 11名

トレッキング・ピークとして人気の高い山で、ネパール観光省の発表では、1991年から96年の6年間に入山許可したのは140隊720名である。

ドイツ山岳会のシュテファン・ハーゼンコプフに率いられた11名をシェルパのチャンバがガイドして入山。11月13日体調を崩した1名を除く11名が死亡したもの、ドイツから派遣された捜索隊によれば、一行は登頂成功後、下山中に最上部のグループが表層雪崩を引き起こし、下のグループも巻き込まれたとしている。尚、8名は5,300m付近で発見収容されている。

III. パキスタン

(4) 1934年7月中旬 ナンガ・パルバット 9名

ナンガ・パルバットはドイツ人の山であり、魔の山である。1934年ヴィリー・メルクルに率いられた登山隊は、35名のシェルパを連れて5月中旬にBCを建設した。6月8日高山病でドレクセルが急死した。しかし、本当の悲劇はその後に待っていた。7月6日隊長以下5名の隊員と11名のシェルパがC8(7,480m)を建設。初登頂は間違いのないものと誰しもが確信した。ところがその夜から物凄い嵐となった。一日待ったが嵐は止まないので8日撤退することになった。道をつけるために先登した隊員がみたものは、C7、C6、C5と

無人のキャンプであった。C4にいた支援隊も嵐で動けなかった。10日にはラキオト・ピークの肩の下でニマ・ドルジェとニマ・タシが、C5の手前でピンツォ・ノルブが死んだ。残った本隊もまたジルバー・ザッテルの下でビバークとなり8日夜、ニマ・ノルブは死んだ。C7の手前30mでウリー・ヴィーラントは死んだ。10日夜ジルバー・ザッテルの下でダクシーも死んだ。11日C7にはメルクル隊長、ヴェルツェンバッハとアン・ツェリン、ゲー・レーの二人のシェルパがいた。12日から13日にヴェルツェンバッハが死んだ。14日C6に向かったがビバークとなった。アン・ツェリンが救援のため下山、その日C4に辿り着いた。残された二人はモーレンコップの岩峰まで辿り着いたがそこが終焉の場となった。こうして頂上まであと4～5時間の距離まで迫りながら隊員3名とシェルパ6名の死という結末に終わったのである。

(5) 1937年6月14日 ナンガ・パルバット 16名

ドイツのナンガ・パルバットにおける悲劇は再び悪夢となって起きた。カール・ヴィーン隊長と6名の隊員は、6月11日C4に集結した。しかし14日夜から15日にかけて、このC4がラキオト・ピークからの雪崩によって埋められ、9名のシェルパ共々16名全員が死亡したのである。

(64) 1986年8月中旬 K2 5名

「ブラック・サマー」と呼ばれる遭難事故が起きた。これは、高峰登山の力量を備えた各国のクライマーが、下山途上で次々と倒れたレケースである。これらのクライマーたちは、所謂固定ロープを持たない層であったが、同時期固定ロープをルート上に先行して張り巡らせていた韓国隊の存在も考慮されなければならないだろう。多少体調が悪くとも固定ロープがあれば上に行けるからである。

南東稜の7,900m付近は、通常の際が最終キャンプを張る場所である。8月2日にディームベルガーとテュリス(f)、ラウスとミョドヴィッチ＝ヴォルフの二組のペアとオーストリアのイミッツァー、パウアー、ヴィーザーの3名が韓国隊の最終キャンプがあるこの付近にキャンプした。しかし、韓国隊が頂上アタックした翌日この7名はそのまま

そこを動かなかった。結局4日にアタック。ヴォルフとヴィーザーは断念したが、残る5名は登頂。ディームベルガー組はテュリスが滑落したため止まった所でビバーク。残る5名はキャンプ地に戻った。翌日も5名はそこを動かず降りてきたディームベルガー組と一緒にた。その夜から悪天候・嵐となり一步も動けなくなった。八千メートルラインで6泊となった7日にテュリスが衰弱で死んだ。食糧も尽きた。10日ようやく晴れてきたがラウスはもう動けなかった。残る5名が下降を開始したすぐにイミッツアーとヴィーザーが倒れた。そして6,400mのC2に辿り着けたのは、バウアーとディームベルガーだけであった。ヴォルフもまた行方不明となったのである。アルパイン・スタイルの負の面が如実に描き出された遭難であった。

IV. 旧ソ連

(29) 1974年8月7日 レーニン 8名

レーニン峰では毎年、国際キャンプが開催されていた。旧ソ連の女性隊はレプキン稜から北稜にトラバースするルートから登頂を目指していた。8月5日～7日と悪天候が続いたが、この時頂上直下にテントを張った女性隊8名の内、7名がテントから6,950mの間で点々と凍死体で発見され、残る1名もテント内で凍死した。

(82) 1990年7月13日 レーニン 43名

国際キャンプ開催中のシレーニン峰が地震に見舞われ雪崩が発生し、大量遭難となった。場所はラズジェリナヤ・ルートのC2(5,300m)である。襲われたのは夜である。イギリスの公募隊によると、事故現場の手前にキャンプを張ったため難を逃れたが、大雪崩の前にいくつかのデブリがキャンプ手前まで迫っていたが、襲われたC2のソ連人たちは注意を払っていなかったとのことである。この結果、助かったのは2名だけで、43名が死亡し遺体が収容されたのは、わずかに3名だけであった。

V. 中国

(15) 1961年6月19日 コングール・チュビエ

1955年10月24日、ガネッシュ・ヒマールI峰の初登頂に成功したフランスのクロード・コーガン

は、当時の女性としての高度記録を塗り変えた。しかし、この記録は59年7月7日ムスターグ・アタに登頂した中国人女性(パンドウーら8名)によって更新された。60年春にチョモランマ登頂に成功した中国では、勢いを得て61年にコングール・チュビエ(7,595m)に12名から成る女性登山隊を派遣した。今の時代とは違い、その当時は女性登山隊には、男性がエスコートしていたのである。

4つのキャンプを出し、6月16日に15名が最終キャンプのC5(7,300m)に到達した。翌17日天候の悪い中登り続け、21時30分頂上直下30mに到達したが、陳栄昌(男性)ら5名が断念。シーラオ、パンドウの女性2名と陳三、拉巴才仁、鄔宗岳の男性3名が登頂し、二人は見事女性記録を塗り変えたのである。しかし、19日に下山途中の衡虎林(男性)が、7,200mでクレバスに転落死亡。続いて7,100mでシーラオと男性の拉巴才仁、穆炳鎖、陳宏基の4名が雪崩のため死亡してしまった。パンドウはこうして、ムスターグ・アタ、コングール・チュビエ登頂の実績の上に立って、75年のチョモランマ登頂への足掛かりを掴んだのである。

(参考文献)

1. ヒマラヤの高峰
2. 岩と雪、山岳年鑑各号
3. ヒマラヤン・ジャーナル
4. アメリカン・アルパイン・ジャーナル
5. インディア・マウンテンアー
6. 氷山雪嶺二年年
7. 中国登山運動史
8. 世界山岳名著全集
9. ヒマラヤ名峰事典
10. コンサイス外国山名辞典
11. 中国登山指南
12. 世界山岳百科事典
13. 世界山岳地図集成
14. 山岳各号
15. 山と溪谷各号
16. 岳人各号

(以上は、今回の遭難に関する記事全てについての参考文献である)

ヒマラヤ登山大量遭難一覧表

(－原因による遭難で3名以上死亡)

(対象は標高6,000m以上の山、遭難者の〔 〕内は、シェルパなど現地雇用者)

No.	遭難日	山 名	国	標高	人数	所属	遭 難 者 名	遭難場所	原 因
01	1895, 8, 24	ナンガ・パルバット	P	8,126	3	英	A.F.ママリー (40) 〔ラコビル・ツァバ、ゴマン・シン〕	6,200m付近	行方不明
02	1905, 9, 上	カンチェンジュンガ	N	8,586	4	英,他	A.パッヘ〔HP3名〕	6,300m下	雪崩
03	22, 6, 7	エヴェレスト (北)	C	8,848	7	英	〔ノルブ、ラクパ、バサン、ペマ、ドルジェ、レンバ、サンゲ〕	Nコル下	雪崩
04	34, 7, 中	ナンガ・パルバット	P	8,126	9	独	U.ヴィラント、W.ヴェルツェンバッハ W.メルクル、〔ニマ・ドルジェ、ニマ・タシ、ピンツォ:ノルブ、ニマ・ノルブ、ダクシー、ゲー・レー〕	銀鞍からの下降中、次々と倒れる	高山病 (衰弱)
05	37, 6, 14	ナンガ・パルバット	P	8,126	16	独	K.グリーン、P.エランハウザー、A.ゴッター、G.ヘップ、H.ハートマン、P.ムレリター、M.プヘッファー、〔テグマイ、バサン・ノルブ、チョン・カルマ、カルミ、ミンマ・ツェリン、ニマ・ツェリンI、ニマ・ツェリンII、ギャルゼン、モンジョ、アン・ツェリンII〕	C 4 (就寝中)	雪崩
06	39, 7, 30	K 2	P	8,611	3	米	〔バサン・キリク、ピンツォ、バサン・キタール〕		行方不明
07	55, 8, 下	ボベータ	S	7,439	11	旧ソ	シービス、シギトフ、スースロフ他	6800~6930m	悪天候
08	57, 4, 30	レンボ・ガン	N	6,979	3	英	C.フォックス 〔シンマ・テンジン、ラクパ・ノルブ〕	C 4 上 6,000m	雪崩
09	57, 6, 13	ミニヤ・コンカ	C	7,556	3	中国	師秀(39) 国徳存(33) 彭仲穆(33)	6,800m	滑落 ↓
10	57, 6, 下	バトゥラ I	P	7,785	5	英,独	K.ワルバートン(31) R.クナイト(25) H.ステファンソン(23) A.ヒルスビッチャー(27) M.グーネル(28)	C 3 上 6,850m付近	行方不明
11	59, 8	ボベータ	S	7,439	3	旧ソ	3名	北稜6,600m	行方不明
12	59, 11, 上	チョー・オユー	C	8,201	3	国際	C.コガン(f)、C.ストラッテン(f) 〔アン・ノルブ〕	C 4 7,100m	雪崩
13	60, 7, 18	ボベータ	S	7,439	10	旧ソ	10名 (29名が呑みこまれる)	北稜 5,600m上	雪崩
14	61, 5, 11	ランタン・リルン	N	7,234	3	日本	森本嘉一(44) 大島健司(27) 〔ギャルツェン・ノルブ〕	C 3 5,600m (懸垂氷河)	雪崩
15	61, 6, 19	コングール・チュビエ	C	7,530	4	中国	シーラオ(28f) 穆炳鎖 拉巴才仁 陳宏基	7,100m	雪崩
16	62, 6, 20	レオ・パルギャル	I	6,791	3	印	P.バクシ〔ギャルツェン・ミクチュン、カルマ、ウォンチュー〕	6,460m	滑落
17	67, 11, 下	ムカル・ペー	I	6,069	3	英	ジェフリー・ヒル〔ベンバ、S.クマール〕	C 1	雪崩
18	69, 4, 28	ダウラギリ I	N	8,167	7	米	B.エヴァレスト、P.ガーハード、J.ホーマン、W.ロス、D.サイドマン 〔バンボチェ・テンジン、プタール〕	氷河上 5,182m	雪崩
19	69, 11, 上	ダウラギリ IV	N	7,661	6	奥	R.ホイヤー(26) P.ラピカ(28) K.リン(28) P.ネメク(26) K.レハ(21) 〔ニンドラ〕	C 5 6,900m	行方不明

No	遭難日	山 名	国	標高	人数	所属	遭難者名〔 〕内はハイポーター	遭難場所	原 因
20	70, 4, 5	エヴェレスト	N	8,848	6	日本	〔ミマ・ノルブ、ニマ・ドルジェ、ツェリン・タルキー、パサン・クンガ、ノルブ、カミ・ツェリン〕	アイス・フォー	雪崩
21	71, 5, 4	ダウラギリ V	N	7,618	3	日本	手塚英信(30) 柳沢利文(27) 青木憲一(23)	7,000m	転落
22	71, 8, 下	ノジャック	A	7,492	4	ブル	エヴァシレフ、A.ザハリエフ、P.ゲオルギエフ、H.ザバンゾフ		行方不明
23	71,10,16	ガンガブルナ	N	7,455	8	日本	小木曾巖(29) 笹川広平(25) 箱山益夫(23)〔アン・ギャルツェン、アン・ペマ、ナワン・チョタル、ギルミ(ギルミ・ドルジェ、ベンバ・ヌルブ)〕	C 3 6,500m ()内の 2 名 は17日死亡	雪崩
24	72, 4, 11	マナスル	N	8,163	15	韓国	金植燮、朴昌熙、宗俊行、呉世限、安久一成〔ベンバ・リンジン・ラマ、ワンゲル・ラマ他 8 名〕	C 3 6,500m	雪崩
25	73, 5, 18	アンナブルナ I	N	8,091	5	日本	高橋貞利(37) 浜正則(3) 片桐一三(23) 牛越正(30)〔チョン・リンジ〕	C 3 ~ C 4 間	雪崩
26	73,10, 8	キュンカ・リ	N	6,601	3	日本	押谷光喜(30) 鈴木真一(25) 加藤学(22)		雪崩
27	73,10,12	プタ・ヒウンチュリ	N	7,246	3	日本	水谷勇(25) 出口光男(20) 〔アン・ニマ〕	C 5	雪崩
28	74, 4, 19	ダウラギリ IV	N	7,661	3	英	〔ダワ・ツェリン、カミ・サルキ、アン・ツェリン〕	C 1 ~ C 2	雪崩
29	74, 8, 7	レーニン	S	7,134	8	旧ソ	女性 8 名	7,000m	疲労凍死
30	74, 9, 9	エヴェレスト	N	8,848	6	仏	G.ドヴァゾー〔ラクバ、サヌ・ワンギャル、ベンバ・ドルジェ、ナワン・ルトク、ニマ・ワンチュ〕	西稜肩 6,400m	雪崩
31	74, 5, 30	リシパハール	I	6,992	4	印豪	V.ラマチャンドラ、S.クンド(インド) J.テレマイン、V.シンプソン(豪)	C 2 5,200m	雪崩 (女性隊)
32	75, 3, 25	ダウラギリ I	N	8,167	5	日本	沼尾吉心(25) 〔パサン・カミ、ポータ 2 名〕	C 1 4,500m	雪崩
33	76,10,16	ドウナギリ	I	7,066	4	米	G.ステファンソン(54) J.パーチ(19) A.アープ(41) B.カサソラ	6,000m 上	滑落
34	78, 7, 24	ジュトマル・サール	P	7,330	5	日本	尾上均(30) 横内正(26) 佐藤正寛(25) 〔HP 2 名〕	C 1 5,100m	爆風雪崩
35	78, 9, 23	ダウラギリ I	N	8,167	3	日本	阿久沢廣(35) 深沢勇二郎(28) 小林清(28)	6,500m	雪崩
36	78, 9, 14	ガディ・チュリ (P29)	N	7,871	3	日本	牛沢守(30) 万実久次(28) 高橋美丈(23)	C 3 5,640m	懸垂氷河
37	79, 5, 13	ダウラギリ I	N	8,167	3	ス仏	J.ルイ・サリバー(30) E.ホマーレ(26) 〔ベンバ〕	C 5	雪崩
38	79, 7, 13	ディラン	P	7,257	3	スベ	A.ロメロ、R.ハウデス、E.テンプレーノ	C 2	雪崩 ↓
39	79, 7, 27	ゴーカール・サール	P	6,249	6	日本	斎藤洋平(34) 仲西昌寛(44) 鈴木仁(31) 固山良三(43) 関口修克(38) 志賀文孝(28)	C 1 ~ C 2 間	懸垂氷河
40	79, 9, 19	アンナブルナ I	N	8,091	3	米	M.ユーウィック(44) G.ハーダー(33) B.ロバーツ	C 4 6,500m	雪崩
41	79,10,12	エヴェレスト (北)	C	8,848	3	日本	〔王鴻宝、米馬扎西、羅朗〕	N コル下	雪崩
42	79,10, 9	パタール・ヒウンチュリ	N	6,441	3	日本	藤井博子(28) 山崎のり子(28) 〔HP 1 名〕	4,000m	雪崩
43	80, 3, 下	アンナブルナ III	N	7,555	3	奥	S.モース、N.リーヴス〔HP 1 名〕	C 1 上	雪崩

No.	遭難日	山 名	国	標高	人数	所属	遭難者名〔 〕内はハイポーター	遭難場所	原 因
44	80,10, 9	ガネッシュ・ヒマールⅢ	N	7,110	3	日本	黒岩薫(26) 水野勝(22) 照井博(35)	5,600m	雪崩
45	81, 5,10	ミニヤ・コンカ	C	7,556	7	日本	島田昌明(28) 浦光夫(32) 中嶋正博(35) 松永浩(28) 佐々木茂(31) 小田島均(31) 小野寺忠一(29)	7,000m	滑落
46	81, 5,10	ガッシャーブルムⅣ	P	7,980	3	日本	竹辺光一(30) 白沢裕之(25) 西岡寛和(20)	7,000m上	懸垂氷河
47	81, 7,23	コンゲール	C	7,719	3	日本	鴨満則(36) 寺西洋治(36) 松見新衛(35)	6,500m上	行方不明
48	81, 9,上	ホワイト・セール	I	6,446	3	日本	中村宣幸(22) 土方浩(23) 萬濃英士(21)	5,700m上	行方不明
49	81, 9,23	ジャオンリ	I	6,632	4	日本	小美浪洋子(32) 田島よう子(33) 加藤れい子(27)〔 バル・シン(32) 〕	6,000m下	雪崩
50	81, 9,27	ナンダ・カート	I	6,611	7	日本	藤倉和美(31) 寺本政幸(30) 鈴木陽一(28) 阿部直彦(35) 本多莊八(30) 斎藤孝雄(35) 埜口正則(29)	C 3 6,000m	雪崩
51	81, 9,27	アンナプルナⅠ	N	8,091	4	仏	A.ドリユ(27) I.ファブル(36)〔 ペンバ・ツェリン、ニマ〕	C 1 & C 2	雪崩
52	82, 8,31	エヴェレスト	N	8,848	3	加	〔 アン・チョルデン、バサン・ソナム、ダワ・ドルジェ 〕	アイス・フォール	雪崩
53	83, 7,12	ナンガ・バルバット	P	8,126	3	日本	山田信義(44) 飯田敏(46) 高森雄一郎(30)	C 1 5,050m	雪崩
54	83, 9,24	アンナプルナⅠ	N	8,091	3	韓国	隊員1名〔 ポーター2名 〕	C 2	雪崩
55	83,10, 9	ブリグパント	I	6,772	3	台湾	ファン・テュンジェ(29) ス・チンジュン(28)〔 アン・バサン 〕	↓	行方不明
56	83, 7,上	ナンガ・バルバット	P	8,126	4	日本	角田不二(32) 今給黎宣幸(28) 肥田繁男(26) 小暮孝(26)	C 3 6,700m	雪崩
57	85,10,11	エヴェレスト	N	8,848	4	印	R.S.バクシ(25) V.B.シン・ネギ(28) ジャイ・ハフダナ(35) M.U.B.ラオ(24)	S.コル	疲労衰弱
58	85,10,18	ランタン・リルン	N	7,234	3	米	D.ニューウェル、E.スペイク〔 ギャルトゥエン 〕	4,900m	雪崩
59	85,11,上	ガネッシュ・ヒマールⅣ	N	7,052	3	ボ	K.ソビッキ、V.ヤンチャワ、K.ブシスタウ	4,900m	雪崩
60	86,	ハグシュ	I	6,330	4	英			行方不明
61	86, 5,21	サトパント	I	7,075	3	印	ミノー・メータ、ナンドゥ.K.バーゲ、〔 ナイン・バハドール 〕	C 2 6,000m	雪崩
62	86,10,上	メールN	I	6,400	3	日本	鈴木莊平(38) 田村省司(31) 小林一弘(2)		雪崩
63	86,10,15	ヒマール・チュリN	N	7,540	3	独伊	V.ヴァインツィール(39) P.ヴァウアー(21) G.アイゼンド(22)	C 2上	雪崩
64	86, 8,中	K 2	P	8,611	5	混成	J.テュリス(f) A.ラウス、A.イミッツアー、H.ブイーザー、D.ショドヴィッチ・ヴォルフ	南東稜上	疲労衰弱
65	87, 5,25	カンチェンジュンガ	I	8,586	3	印	ブー・ドルジ、チョルテン・ツェリン、ブー・ブ・プティ	頂上直下	行方不明
66	87, 7,29	ガッシャーブルムⅠ	P	8,068	4	パキ	4名	7,000m	雪崩
67	87,夏	コムニズム	S	7,495	5	旧ソ	5名		雪崩
68	87,夏	クララ・ツェトキン	S	6,600	4	旧ソ	4名		雪崩
69	87, 9,27	ローツェ・シャル	N	8,400	3	スベ	A.ソルス・フェレル(48) S.エスカレラ(33) A.キニョネヌ(27)	7,350m上	雪崩

No.	遭難日	山名	国	標高	人数	所属	遭難者名〔 〕内はハイポーター	遭難場所	原因
70	87,10,13	クン	I	7,077	5	奥	ウィリー・ジャデン他		雪崩
71	88, 8,23	ハン・テン・グリ	S	7,010	3	旧ソ	U.ヤプリンスキー、P.ウルリヒ M.ハイドシュ		滑落
72	88, 9,24	ガンゴトリⅡ	I	6,599	6	印	N.パネルジー、A.マンデル、〔ゴバル・ シン・ゴサイン、パルワン・シン、ブッ ディ・シン〕	C 2 上	雪崩
73	88,10,18	エヴェレスト	N	8,848	4	チェ	D.ベチク(34) P.ボジク、J.ヤシコ J.ユスト(33)	8,300m	転落
74	89, 2	コムニズム	S	7,495	6	旧ソ	6名	5,700m	雪崩
75	89, 3,21	ランタン・リルン	N	7,234	3	日本	二見教行(28) 桑島泰久(23) 久本真 寛(20)	4,900m	雪崩
76	89, 5,27	エヴェレスト	N	8,848	5	混成	M.ドンサル(36) m.ガジェフスキ(35) E.フロバック(49) G.ハイリフ(51) V.オトレンバ(41)	C 1 上	雪崩
77	89,10,13	ブモリ	N	7,161	4	スベ	F.サルガド・リベラ、A.ルイス・ガレア F.マリア・デ・ミゲル、P.デ・ミゲル	6,400m	雪崩
78	89,12,20	ヤルン・カン	N	8,505	3	韓国	J.キョスプ(26)〔アン・ダウⅡ、ツェリ ン・ツァンパ・ラマ〕	頂上付近 ↓	行方不明
79	89,12,	ダウラギリⅠ	N	8,167	3	混成	G.バーハー(20) S.マグラス 〔ヌル・ワンチョク〕	6,400m上	行方不明
80	90, 3,27	マナスル	N	8,163	3	米	C.シャーツ(37) N.ジャクソン(36f) 〔ニマ・ウォンチュク〕	4,720m	雪崩
81	90, 5	メルーン	I	6,400	3	スベ	M.ガルシア・パスワル(f) D.エカディ オ・マルティネス M.ラウシン		行方不明
82	90, 7,13	レーニン	S	7,134	43		旧ソ連27名、チョコ6名、イスラエル 3名、ドイツ3名、スイス2名、スベ イン、イタリア各1名	C 2 5,300m	雪崩 (地震)
83	90, 8,12	トムール	C	7,439	3	日本	西堀秀二(40) 井上誠(28) 伊藤昌彦 (20)	C 3 5,800m	雪崩
84	90, 9,14	エヴェレスト(北)	C	8,848	3	スベ	R.G.メノー〔アン・ソナ、バドリナー ト・ギシン〕	Nコル下	雪崩
85	90,10, 6	マナスル	N	8,163	3	旧ソ	M.ガリエフ(29) G.ルニャコフ(35) G.ハリトフ(39)	7,000m上	転落
86	91, 1, 3	メイリ・シュエシャン	C	6,740	17	日・中	宗志義(40) 孫維埼(31) 李之雲(34) 王建華(37) 井上治郎(40) 佐々木哲 男(30) 清水久信(36) 近藤裕史(33) 米谷佳晃(32) 宗森行生(32) 船原尚 武(30) 広瀬顕(27) 児玉裕行(23) 笹倉俊一(21) 工藤俊二(22) 〔林文庄尾(22) 斯那此里(26)〕	C 3 5,100m	雪崩
87	91, 5,22	シシャバンマ	C	8,027	4	独	V.ブラウン、V.マイヒスナー、 G.ゼムラー、K.ハインツティレ	7,800m上	行方不明
88	91, 9,19	アンナプルナⅠ	N	8,091	6	韓国	L.サンク、L.ソクチュ〔テンジン、ジャ ンプ、チャクパ・ディンティ、サンゲ〕	7,500m	雪崩
89	92, 5,11	ブモリ	N	7,161	4	韓国	S.ソンス(35) K.ベクグォン(24) S.ユンドク(24)〔バクタ・バハドゥル・ ライ〕	C 3 6,800m	雪崩
90	92, 9,下	マイクトリ	I	6,803	3	印	ジャクデシュ・ビスト、トリヴバン・コ ランガ、ディブ・ネギ	ABC	雪崩
91	92,12,18	ランタン・リルン	N	7,234	3	韓国	K.ジンヒュン〔ビル・バハドゥル・タマ ン、ドルジェ・タマン〕	5,600m	転落 ↓

No.	遭難日	山 名	国	標高	人数	所属	遭難者名〔 〕内はハイポーター	遭難場所	原 因
92	93, 7, 25	ハン・テングリ	S	7,010	4	ウ・ボ	スラヴァ、セルゲイ（ウクライナ） M.ハンゼル(22) V.クライエフスキ (26)	コル 5,800m	雪崩
93	93, 8, 4	ハン・テングリ	S	7,010	4	K・英	R.ガイ、P.ウェスト(英) W.フリシチャーティ(41) I.イオディス	氷河上 5,000m	雪崩
94	93, 9, 30	ニルカント	I	6,596	6	日本	佐々木裕一(42) 小林譲(45) 若林善 則(37) 高野春夫(45) 増田玄(24) 難波毅(22)	6,100m	懸垂氷河
95	94, 7, 10	K 2	P	8,611	3	ウ	A.ハラルディ(36) A.バルホメンコ (39) D.イブラジム・サデ(39)	8,480m	転落 ↓
96	94, 9, 28	ミニヤ・コンカ	C	7,556	4	日本	福沢卓也(28) 渡辺靖之(27) 鈴木洋介(27) 工藤潤二(22)	5,950m	雪崩
97	95, 11, 13	ピサン・ピーク	N	6,091	11	独	S.ハーゼンコブフ(26) C.グリユック C.カインドル、H.クロッピング、M. マック、B.ネストル、S.ツシェツシュ、 T.フィリップ、B.ライス（以上ドイツ） C.アミ(スイスf)〔チャンバ〕	5,800m	雪崩
98	96, 5, 11	エヴェレスト（北）	N	8,848	3	印	ツェワン・スマンラ、ツェワン・バルジ ョー、ドルジェ・モルツプ	第二ステッ ブ ↓	疲労凍死
99	96, 5, 11	エヴェレスト	N	8,848	4	混成	ロブ・ホール、難波康子(47) ドーガル・ ハンセン、アンディ・ハリス	Sコル上	疲労凍死
100	97, 8, 20	スキルブルム	P	7,360	6	日本	広島三朗(54) 原田達也(62) 土森穰 (60) 中込清次郎(50) 永澤茂(47) 菊田佳子(37)	BC 5,300m	懸垂氷河
101	96, 7, 20	ブロード・ピーク	P	8,051	3	韓国	ハン・ドンキュン(29) ヤン・ジェモ(24) リム・サンタク(24)		行方不明

(注1) 合計 101件 死亡者総数 500人

(注2) 国名の略：N＝ネパール、P＝パキスタン、I＝インド、C＝中国、S＝旧ソ連

A＝アフガニスタン

HAJ 図書と地図の販売

■図書

1. 雪の住処30年の記録 B 5判 442P 3,500円
2. 知られざる北部シッキムの山々
B 5判 82P 2,240円
3. 東部カラコルム B 5判 103P 2,240円
4. ナムチャ・バルワ B 5判 56P 2,240円
5. 天壇の山に挑む B 5判 140P 2,810円
6. 雪域神山（チベットの山写真集）
A 4判 237P 6,700円
7. ネパール登山の手引き B 5判 145P 2,310円

■地図（いずれも中国製で2,000円）

1. チョモランマ
 2. チョゴリ
 3. シシャパンマ
 4. コングルー&ムスターグ・アタ
 5. カン・リンポチェ（カイラス）
 6. ナムナニ（グルラ・マングータ）
 7. ニンチン・カンサ
- －以上は10万分の1で中文のみ－

つながる

地域ニュース

《ネパール》

1999年エヴェレスト清掃隊

ネパール山岳協会（NMA）は、アメリカ合衆国国立地理学協会（NGS）、マケドニア登山協会（MACA）、ロシア山岳連盟（MAF）それにフィニッシュ・テレビ社の協力の下に、1999年春季にエヴェレストのベース・キャンプ～サウス・コル間の清掃を行う予定である。

この清掃のための予算額は、約12万9千ドルで、その内10万ドルをNGSの地理学調査財団に依頼、NMA、MACAそれにMAFで残りの2万9千ドルを確保する計画である。

MACAの計画参加意図は、主としてディミタル・イリーヴスキー・ドネの遺体の回収及びマケドニア在住の彼の遺族への遺骨の返還である。ディミタルは1989年のエヴェレスト・ローツェマケドニア登山隊に参加、サウス・コル近くで遭難している。

清掃登山で発見されるその他の遺体については、遺族の承諾を得て、身元の判明する場合にはベース・キャンプに降ろし、丁寧に火葬する。

ロシアの登山家達は、将来の清掃活動にそなえて、ポータブルなウインチ設置の可能性を探る。コーカサスでのシステムのように発展するようになる。

フィニッシュ・テレビ社は、ベース・キャンプまで入り、清掃隊の行動にはシェルパが同行して、実況中継のドキュメンタリー・フィルムを作成する予定である。

30名の登山家（内20名はネパール人、10名が外国人）は、5月から6月にかけての45日間、この清掃登山に従事する予定である。サウス・コル周辺からは、およそ5～6トンのゴミが回収され、それらはベース・キャンプまで降ろされ、ルクラやカトマンズでリサイクルに回されたり処分される。初期の登山隊が使用した古い酸素ボンベは、NMAが回収し、清掃隊の支援者にお土産として

贈与する。

この清掃隊への問い合わせ先は、下記の通りである。個人・団体を問わず、興味をお持ちの方は連絡願いたい。

Nepal Mountaineering Association

Nag Pokhari, Naxal, Kathmandu, NEPAL

Phone: 997-1-441-525, Fax: 977-1-416-278

E-mail: peaks@nma. wlink. com.np

（提供：ネパール山岳協会）

サガルマータ春の登山状況

☆1998年ブレモンズーン、エヴェレスト登山状況
（ネパール側） 1998/6/3 観光省調べ

【入山隊】

①米国	（3隊）	④ボリビア	（1隊）
②英国	（2隊）	⑤シンガポール	（1隊）
③イラン	（1隊）		

計 8隊

【登頂者、出身国別】

①米国……………7人	⑤ボリビア……………1人
②英国……………4人	⑥スウェーデン…1人
③イラン……………4人	⑦ネパール……………24人
④シンガポール……2人	計 43人

《インド》

インド冒険旅行業界最新情報

5月21日、ニューデリーのパークホテルに於いて、冒険旅行協会の定期会議が初めて催された。会議の主な議題は、登山特にトレッキング・ピークや、制限地区内でのトレッキング参加人数最低4名以上などに関する規制の緩和の必要性についてであった。主賓の観光大臣オーマク・アパン氏は、冒険旅行協会が直面している諸問題の解決に、全面的に協力すると約束した。（提供：沖允人氏）

ニューデリーの夏

今年のデリーの夏は異状な暑さである。気温は摂氏47度を越えていた。そしてインドは、現在マンゴーの季節である。マンゴーの王者と云われるマハラシュトラのアルファンソを始め、ラクノウ

のダッサヒリなど、インド各地から色々な種類のマンゴーが出回っている。マンゴーを堪能しに、是非インドを訪れて下さる事を期待している。

(提供：シカール・トラベル)

登山家諸氏にビッグ・ニュース

USA アルパインクラブのカルロス・ビューラー率いる、今年初のインド・ヒマラヤ登山隊のロシア・アメリカ合同チャンガバン登山隊が、同峰の北壁からの登頂に成功した。彼等は、ニューデリーで盛大な祝賀会を催した。

登山隊の行動に関する詳細は、カルロス・ビューラーのEメールを参照の事。

cbuhler@mountana.campus.mci.net.

(提供：シカール・トラベル)

シカール・トラベル社インターネット案内

日本の登山隊に馴染の深いインドのシカール・トラベル社が、インターネットでのトレッキング案内を始めた。日程や費用なども含めた案内となっている。

//www.shikhar.com/

また、Eメールは下記の二つである。

Stipland@gems.vsnl.net.in

shikhar travels.vsnl.net.in

(提供：シカール・トラベル)

《中国》

チョモランマ三人目の登頂

国際公募隊のラッセル・ブライズ隊に参加していた続素美代さんが、5月25日午後零時30分に北稜からチョモランマの登頂に成功した。これは、最高峰登頂の日本人女性としては、田部井淳子、難波康子両氏に次ぐ3番目の記録である。

トピックス

近藤和美氏が山田昇氏を抜いてトップに
ー トータル獲得標高ー

近藤和美氏(56)は、5月22日チョモランマ北稜

から登頂に成功し、トータル獲得標高を119,080mとし、故山田昇氏が1988年11月6日にチョー・オユーの登頂によって達成した115,804mの記録を更新してトップに立った。故山田氏はこれによって1984年夏にマモストン・カンリ初登頂によって、57,015mで尾崎隆氏を抜いてトータル獲得標高のトップに立って以来14年間守り続けて来たトップの座を譲り渡すこととなった。

近藤氏はチョモランマを含めて、八千メートル峰4座に登頂。また、七千メートル峰は7座に12回登頂して、今回の記録となったもの。これに対して山田氏はエヴェレスト3回、ダウラギリ2回を含めて八千メートル峰の9座に12回、七千メートル峰2座初登頂で達成したものである。尚、本年春のシーズンを終了した時点の第三位は、田辺治氏(37)の93,383mである。

トータル獲得標高とは、1983年夏に「ヒマラヤ142号」に山森が「50,000メートルを目指す男たち」と題して、ヒマラニストの評価の一方法として提案したものである。詳しくは、142号を参考にさせていただきたいが、「トータル獲得標高」とは、基本的には、「七千メートル峰以上を対象に、BCから登頂に成功した山の標高を合計した数字」のことである。縦走は最高峰のみが加算される。ちなみに1983年6月末現在のトップは、故加藤保男氏の42,516mで以下、山田昇、重広恒夫、富田雅昭、尾崎隆氏と続き、20,000m(3座登頂)を超えていたのは、わずかに17名であった。これが15年後の昨年末には、136名の多きにのぼっている。

(山森 欣一)

アナトリー・ブクレエフの覚え書き

アナトリー・ブクレエフのアンナプルナでの遭難のニュースはヒマラヤ316号で紹介した。彼に関しては昨年邦訳も出版された「空へ」のなかでも取り上げられているが、96年春のエヴェレストでおきた大量遭難時の彼の行動を、身勝手なガイドとするか、多くの人命を救ったヒーローとするか意見がわかれている。彼についてあるホームページで大きく紹介されているので、それをもとに、日本ではあまり注目されていなかった彼の登

山歴を紹介したい。

1970年にウラル山脈で山登りを始めた彼は、ヒマラヤデビューを果たす前に、パミールや天山で30回を超える7000mの登頂を果たしている。その中にはレーニンやボベダのトラバース及びスピード登山がある。

1989年、ソ連隊のカンチェンジュンガ(8,586m)縦走隊に選ばれ、ヤルン・カンから主峰、中央峰、南峰の縦走隊員となる。1990年にはボベダの冬期初登頂を行ない、翌年春、ダウラギリ I 峰(8,167m)の西壁の初登攀。秋にはアメリカとの合同隊でノーマル・ルートからエヴェレスト(8,848m)に登頂。1993年ドイツの国際隊に参加、チョゴリ(8,611m)を登る。1994年春にマカルー(8,463m)、95年春にはチョモランマ(8,848m)、秋にはダウラギリ I 峰、冬にマナスル(8,163m)に登頂(年間ハットトリック)。1996年、エヴェレスト登頂の1週間後にローツェ(8,516m)に登頂。秋にはシシャパンマC(8,008m)に登っている。

1997年4月23日、インドネシア隊の登攀リーダーとして4回目の世界最高峰に成功したブクレエフは(エヴェレスト登山では初めて酸素を使用した)、1ヶ月後にエヴェレストへの縦走を目指して、イタリア人のシモーネ・モロとローツェに登ったが縦走はあきらめた。その後、カラコルムに向かい、7/7にブロード・ピークに登頂する。しかし、この登頂は同じ時期に行っていた者たちから前衛峰(8,006m)までであると報告されている。ブクレエフはさらに7/14ガッシャーブルムII(8,035m)に登頂。80日間で8000m峰4座に登ったことになる。

そして昨年クリスマスにアンナプルナ I (8,091m)南壁の新ルートを目指して登山中、雪崩により命を失う。享年39歳。ロシア生まれのカザフ人と伝えられる。(中川 裕)

BOOKS

ヒドンピーク初登頂

1958年夏アメリカ隊によって初登頂されたガッ

シャールム I の記録。隊員の一人でその後アメリカ山岳会の会長となったニコラス・クリンチによって、初登頂の翌年に書かれたもの。もっともアメリカで原文が出版されたのも初登頂から24年後の82年である。59年に脱稿していたそのままで出版されたので回顧録ではない。

所謂ヒマラヤ黄金時代の八千メートル峰初登頂でありながら、全くプライベートな登山隊であったことに驚くと共に、その登山隊にイギリス、フランス、スイスなどの著名な登山関係者が彼らに国境を越えて惜しみない支援をする。やはり古き良き時代である。

登山には固定ロープ、ハイポーター、酸素を使用するのであるが、読んでいて今流行の中高年登山と全く異質のものであることが伝わってくる。

同年にはガッシャーブルムIVのイタリア隊とチョゴリザの京大隊が入山し両隊とも初登頂に成功したが、エピローグでは京大隊の登頂したのは最高点ではなかったとの指摘があることを紹介している。

本書の中で評者が一番感銘を受けたのは、登山終了後に著者とショーニングが、ショーニングが参加した53年アメリカのK2隊で死亡した隊員の墓参りを行い、そこでの描写「山の歴史は、それに挑んだ人間に焦点をあてて語られるものである」との一節であった。今、八千メートル峰登山のみに熱中している人々とはあまりにも違う世界が、そこに表現されていると感じた。心地よい読後感が残る。(記：山森)

A5版 405頁 薬師義美/吉永定雄 共訳

ナカニシヤ出版 3,500円+税 4月30日刊

東京集会のお知らせ

日 時 7月27日(月) 午後7時～
内 容 景気払いを兼ねてカラコルムの話題です。
場 所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

ラモ・シェ（田海子山・6,070m）登山計画

ごあいさつ

日本ヒマラヤ協会は、夏の限られた日数で高峰登山を楽しみたい、との会員の希望に応じてサマー・キャンプを実施して参りました。

本年は舞台を中国、四川省の名峰ミニヤ・コンカの北に独立した山群として、これまであまり知らなかった「ラモ・シェ（田海子山）6,070m」山群に求めました。

サマー・キャンプは、総て結集した隊員による登山であります。現地においても隊員がルートを開拓し、荷上げを行い登頂を目指すことを原則としており「ガイド登山」ではありません。

新しい舞台です。これまでの経験を充分に活用しながら細心の注意を払い登山する所存です。

1998年7月

隊長 酒井 國光

計画の概要

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会ラモ・シェ登山隊

1998年

2. 派遣母体

日本ヒマラヤ協会

3. 目標の山

中華人民共和国四川省康定県

ラモ・シェ（6,070m）田海子山

4. 目的

* ラモ・シェ峰の登頂

* 山岳自然環境の保全にもとづく登山（テイクイン、テイクアウトの実践）

5. 登山期間



1998年8月1日～8月23日（23日間）

6. 隊の構成

酒井國光隊長以下9名

7. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ラモ・シェ峰登山隊実行委員会

会長：稲田 定重

（H A J理事長）

委員長：山森 欣一

（同 専務理事）

副実行委員長：酒井 國光

（同 登山隊隊長）

実行委員：八木原罔明、尾形好雄、
寺沢玲子、中川裕、野沢
井歩、隊員

8. 隊の事務局（留守本部を兼ねる）

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4丁目2
番7号 萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会

☎ (03)3988-8474 FAX 03-3988-8502

夜間：隊出発まで

酒井國光

”：隊出発後

山森欣一

日誌

8月1日 成田→北京（CA926便14:55発）

2日 北京→成都（飛行機）

3日 成都にて出発準備

4日 成都→康定（ジープ）

5日 康定滞在（予備日）

6日 康定→BC

7日～17日 登山期間（11日間）

18日 BC→康定

19日 康定→成都（ジープ）

20日～21日 成都滞在（予備日を含む）

22日 成都→北京（飛行機）

23日 北京→成田（CA925便、13:50着）

隊員名簿

隊長 酒井 國光（SAKAI KINIMITSU）

1) 1939年4月 生（59歳）

2) 〒300-23 茨城県筑波郡

3) 聖徳大学附属小学校
 4) 昭和山岳会
 5) 1984 中国、アムネマチンⅡ(6,268m)登頂
 1988 パキスタン、ブロード・ピークM
 (8,051m) 隊長、登頂
 1991 中国、雪宝頂(5,588)隊長、登頂
 1993 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)
 隊長、登頂
 1994 中国、玉珠峰(6,179m)隊長、登頂
 1995 インド、ヌン(7,135m)隊長
 他に海外登山7回
 副隊長 山岸 和男(YAMAGISHI KAZUO)
 1) 1945年2月 生(53歳)
 2) 〒254-0903 平塚市
 3) 平塚西工業技術高等学校
 4) さがみ家族山の会
 5) 1990 中国、雪宝頂(5,588m)隊長登頂
 1992 中国、二姑娘山(5,454m)隊長、登頂
 1994 中国、玉珠峰(6,179m)登頂
 1996 中国、雀儿山(6,168m)隊長
 秘書長 谷田川 武(YATAGAWA TAKESHI)
 1) 1953年9月 生(44歳)
 2) 〒178-00 練馬区
 3) 志村高等学校
 4) 白嶺山の会
 5) 1981 メキシコ、ポボカテペトル(5,452m)
 1988 パキスタン、ファラクサル(5,918m)
 1989 中国、シャラリ(6,032m)
 1992 中国、二姑娘山(5,454m)
 1993 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)
 登頂
 1995 スイス、モンテ・ローザ(4,634m)
 登頂
 隊員 高羽 秀徳(TAKABANE HIDENORI)
 1) 1930年3月 生(68歳)
 2) 〒277-00 柏市
 4) 深田クラブ
 5) 1995 パプアニューギニア、ウィルヘルム
 (4,694m)登頂
 1996 フランス、モンブラン(4,807m)登頂

1997 ブータン、アムジョモ(5,020m)
 登頂
 隊員 高橋富貴夫(TAKAHASHI TOKIO)
 1) 1936年3月 生(62歳)
 2) 〒180-00 武蔵野市
 3) タコタ電機工業(株)
 4) むさしの山の会
 5) 1978 ネパール、ゴーキョ・ピーク(5,400m)
 登頂
 隊員 吉田 和宏(YOSHIDA KAZUHIRO)
 1) 1953年7月 生(45歳)
 2) 〒331-00 大宮市
 3) 大宮西高等学校
 4) 白嶺山の会
 5) 1988 パキスタン、ファラク・サル(5,918m)
 隊員 三宅 愛弓(MIYAKE AYUMI)
 1) 1957年3月 生(41歳)
 2) 〒185-00 国分寺市
 3) ナブコサービス(株)
 4) 昭和山岳会
 5) ネパール、ゴザイングンド(4,380m)
 トレック
 隊員 牧 久真子(MAKI KUMIKO)
 1) 1958年6月 生(40歳)
 2) 〒427-00 島田市
 3) 島田工業高等学校
 4) 静岡こまくさ会
 隊員 安藤 斎(ANNDO TADASU)
 1) 1959年7月 生(39歳)
 2) 〒969-12 福島県安達郡
 3) 県立安積高等学校
 4) 福島こまくさ山岳会
 5) 1991 中国、大姑娘山(5,025m)登頂
 1992 インド、ヌン(7,135m)
 1993 アルゼンチン、アコンカゲア(6,990m)
 1995 インド、ヌン(7,135m)

■ 寸 感 ■

「もう一つのエヴェレスト」と言うべき現象があった。労山や昭和山岳会が登頂し朗報に湧いた時、事務局の電話は報道陣の取材が相ついだ。それが一段落した6月中旬、今度は、地方紙や地方のテレビ局からの取材が続いた。

最高齢登頂の更新や大量登頂だけが話題であろうと思っている身にはこれは意外な出来事に思えた。それは「××県人」として初めての世界最高峰の登頂者の出現であった。東京や大阪などでは、こんなことは話題にもならないが、地方ではかなりインパクトのあることのようなのである。すっかり忘れていたが、十数年前には「△△県人」初の八千メートル峰登頂者と云うのがあったことを思い出した。

(山森)

事務局日誌(6月)

5日(金) ニンチン・カンサ隊費用送金
ニンチン・カンサ、ラモ・シェ両隊
隊貨引き渡し

9日(火) ヒマラヤ320号発送
合同壮行会案内状発送
11日(木) ニンチン・カンサ、ラモ・シェ両隊
の書類をCMAへ発送
21日(日) 故フカム・シン氏散滑(於、富士山、
尾形、寺沢、沖、小川、飛田)
24日(水) ニンチン・カンサ隊ビザ申請
26日(金) 遠藤登前会長の「退任を労う会」
(於、池袋28名)
29日(月) 東京集会(18名)

ヒマラヤ No.321 (8月号)

平成10年7月10日印刷 10年8月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク

TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



**株式
会社**

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア一館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004